

静岡県の外来生物

イセリアカイガラムシとベダリアテントウムシ

平井 剛夫



イセリアカイガラムシを食べようとしている導入天敵のベダリアテントウムシ

静岡県の外来昆虫といえば、歴史的な意味と全国的な農業害虫の防除において果たした役割からみて、柑橘害虫のイセリアカイガラムシとその天敵であるベダリアテントウムシをあげなくてはならない。

イセリアカイガラムシは1911年（明治44年）に清水区興津の柑橘園において発見され、調査の結果すでに近隣にまん延していた。1908年（明治41年）に、貿易業者がアメリカから輸入したレモンの苗木に寄生して侵入したものとされている。このカイガラムシが柑橘などの果樹で増殖すると、樹勢を弱める。また、分泌物にすす病が発生し、これによる被害も大きい。

イセリアカイガラムシの防除は当初、寄生樹の果実や苗木の焼却処分であり、さらに、立木については青酸ガスくん蒸が行われた。こうした徹底した根絶対策とともに、1911年、アメリカで防除に利用し成功したベダリアテントウムシ数百頭が台湾より導入され、静岡県立農事試験場において農商務省の補助により大量飼育が開始された。1912～1916年の五年間に配布されたのは、県内へ5万6千頭、県外12県に4万3千頭であった。増殖配布はその後も無料で続けられ、1970年にその業務は柑橘試験場に移管され、農水省の補助事業として続けられた（古橋嘉一、2002、2010年）。ただし、2003年以降はおこなわれていない。現在も、全国各地に導入天敵のベダリアテントウムシは定着しており、防除の難しいとされたイセリアカイガラムシは各地の防除歴において防除の対象害虫となっていない。

ベダリアテントウムシの捕食量も大きく、一生のうちで200匹内外のイセリアカイガラムシを捕食するという。また、1世代は1か月以内で年間8世代を繰り返し、産卵数も500～600粒に及ぶが、何らかの原因でこの天敵の勢力が減退するとイセリアカイガラムシが増殖する。そのときにテントウムシを放飼すると、被害を軽度抑えて農薬を必要としないという頼もしい役割を果たしてくれたのである。

こうして、静岡県と農林省により進められた原産地の天敵の導入によって防除の難しい侵入害虫の被害回避を成功させた輝かしい防除の歴史として語りつがれている。今年、2013年、イセリアカイガラムシの防除に天敵のベダリアテントウムシを導入して、百年と2年が経っている。

このカラーコラムのために、清水の駒越にある静岡県果樹研究センターを訪れたところ、片山晴喜さんにセンター内にある天敵保護のための囲場の無防除園を案内され、まさにイセリアカイガラムシを食べようとしているベダリアテントウムシを撮ることができた。